



## こころの回復を支える 精神障害リハビリテーション

池淵恵美 著  
医学書院  
2019年3月 286頁  
本体価格 3,400円+税

本書は、精神障害リハビリテーションの入門書で、この領域のわが国の第一人者の一人である著者が単著で執筆した書籍である。本書が出版されたのは、主催する精神医学講座を著者が退官された2019年の3月であり、著者のそれまでの業績を総括するような内容になっている。翌年には新型コロナウイルスが全国的に感染拡大し、ライフステージをとおしたさまざまなメンタルヘルス上の課題への対策が求められ、精神科医療だけでなく精神保健福祉にかかわる支援者全般の対応能力の向上や、社会全体のメンタルヘルスに対する啓発の必要性が増した。著者は、統合失調症の個人面接に関する書籍も最近単著で執筆されており、そちらも興味深い。著者の主要な研究テーマである精神障害リハビリテーションのニーズは今後ますます高まるものと考えられ、今回、本書を紹介させていただく。

本書の内容は、精神障害リハビリテーションの概念にはじまり、精神障害リハビリテーションのプロセスの説明や計画の仕方、就労や恋愛、結婚、子育てなどライフステージの主要なイベントに対するリハビリテーションのあり方、支援者の役割、さらには最近の研究テーマなど、精神障害リハビリテーションに関する主要なトピックを網羅的に含んでおり、読者は自分の関心の高い内容から読み始めるとよいであろう。文体は柔らかく、具体的な模擬事例も豊富に含み、模擬事例は目次にリストアップされており、興味のある事例から気楽に読み進めることもできる。

著者は、発達障害や児童精神医学を主な専門領域としており、不登校や若年自殺など児童青年期領域の課題や周産

期メンタルヘルスなどのさまざまなメンタルヘルス上の地域課題への対応を求められているが、その際に、地域の関係機関の支援者のメンタルヘルス・リテラシー向上の必要性を痛感させられる機会も多い。本書のような良質な入門書は、精神科領域のコメディカルや精神保健福祉にかかわる地域の支援者に理解しやすく、地域の支援者のメンタルヘルス・リテラシーの向上にも有用であろう。

精神障害リハビリテーションの歴史について考えると、精神科デイケアが想起され、わが国では1958年に国立精神衛生研究所（現、国立精神・神経医療研究センター）において加藤正明先生らによる取り組みが紹介されることが多いが、大阪で研修医時代を過ごした筆者は、1953年に始まった堺市の浅香山病院の精神科デイケアがわが国最初の取り組みと教えられた。さらにさかのぼると、2024年に生誕150周年を迎える高知県出身の森田正馬先生が開発された森田療法の軽作業期から作業期にかけては、まさに精神障害リハビリテーションといえる。1950年代といえば、『精神衛生法』の成立や、クロルプロマジンが開発など、精神科医療が大きく変わった時代であり、他の地域でも同様の取り組みは行われ始めていたのかもしれない。精神障害リハビリテーションは時代や地域のニーズに応じて形を変えながら行われてきた普遍的な精神科の支援技法の1つであり、現代社会におけるさまざまなメンタルヘルス上の課題にも応用可能であろう。

近年、精神疾患の社会生活機能に対する認知機能の重要性はますます認識されており、本書では認知機能や社会認知へのリハビリテーションについても説明されている。わが国で統合失調症の認知機能と社会機能との関連について研究されるようになったのは2000年前後からであり、著者は当時からの領域にかかわっており、その理解は深く、説明は明瞭でわかりやすい。認知機能は、実臨床と基礎研究とをつなぐ橋渡し研究においても重要な視点である。精神障害リハビリテーションは、社会のニーズにこたえるために、今後さらに進化していくことが期待され、その入門書として、本書は最適である。

(高橋秀俊)